

ていた、ある古本屋さんでした。この方は研究者にも顔が利いたため、これらの写真には資料的な価値があるのではないかと判断し、同じ民俗学を専門とする先生のところを持ち込みます。その結果、熊本大学の教授が予算をつけて購入することになり、無事に行き先が決まりました。そうして彼が研究室に保管していたのを、たまたま本稿を書いている私が知り、今回『恩納村史』の資料として生かされる目途が立った、というのがこの次第です。多くの偶然が重なった結果、写真は逸失することなく、言ってみれば恩納村に里帰りを果たせたことになります。

埋もれた資源を掘りおこす

これは幸運なケースだったと言えます。そもそも日常的な生活文化を扱う民俗学の立場からすると、何気ない風景写真や昔の人の日記帳などは、とても興味深い資料です。しかしながら現実にはそうした資料は、ゴミと思われて処分されてしまうことが珍しくありません。また、どなたかが押し入れなどから古い資料をみつけ、「学術的な価値があるのでは？」と気を利かせて博物館に相談していただいても、実はタイミング次第では拾い上げられないこともあります。確かに民俗資料の管理は博物館の重要な機能なのですが、その収蔵庫は税金で維持されているため、何でもかんでも受け入れることができるわけではない、というジレンマを抱えているためです。実際、ニユースでご覧になった方もいるかもしれませんが、2024年には奈良県の民俗博物館で、知事が予算の削減のために保管庫の民具(昔の生活道具)資料を破棄するよう指示した出来事もありました。歯がゆいことではありますが、限られた予算と人員の中でいかに地域の資料をすくいあげ、後世に残していけるのか、日本各地で厳しい状況が続いているのが実情です。

そうした中で村史の編さん事業とは、ここで紹介したケースの



写真2 恩納共同売店そばの路上の写真。当時の町の様子が分かる。

もあるわけです。そして、こうした資料は単に学術研究の対象としてだけではなく、将来的には住民のアイデンティティとなり、あるいは観光や地域振興の資源として活用されることが期待されます。「民俗編」の編さんもいよいよ佳境ですが、こうした資料Ⅱ資源を一つでも掘りおこしていけるよう、部会員として尽力していきたいと考えています。

